

人君の事なども話題に上り、楽しい半日を過ごしました。

それから一ヶ月後、早速に丁寧なお便りを頂き、その中に一葉の写真が入っていました。榊牟礼城跡碑建設除幕の記念写真です。「直川の方々が数人加わっているの  
で、ゆっくり貴下から見て貰い度いからです」としたゝめて  
います。又「近世毛利氏と異なり、佐伯氏は、私共の先祖  
たちがお伴をして、肥筑や、日向に生死を共にした領主  
ですから思慕の情は一入です」ともありました。

私は、この便りを読み、数々の『佐伯史談』に書かれた、先生の作品に接しているうちに、先生は何を求め、先人の歩いた道を踏査し続けたのだろうかと考えました。私なりに柱は三つあると推察しました。

一つには、佐伯氏をこよなく思慕し、尊敬して、古きを今に表わそうと努め

二つには、古里、因尾の山野の風物を誰よりも愛し続けて来た

三つには、近世の庶民の味方であり、領主や、庄屋のような特権階級に、批判と抵抗を示した。その底流には人と人との出会いを非常に大事にする、田夫野人のロマンの血が流れています。今頃はきっとあの世で『天国

史談会』を作っているのではと想像しています。

先生は死ぬまで、小さな文字で、ガリ版を切り続けて学びました。これこそ、まさに「老いて学べば、死しても朽ちず」を地で行ったのではないのでしょうか。

私は、今一度、御声咳に接しなかった。残念です。しかし私共のように他郷にある会員は、あのガリ版ずりの会誌を、先生の墓標にして、今後 佐伯史談と共に歩いて行きたいと願っています。

## 羽柴 弘先生のご逝去を悼む

織 部 利 雄

(賛助会員・大分市)

羽柴先生とは生前一度もそのご容姿と声咳に接する機会がなかった。残念で仕方がない。しかしご夫人の八重さまとは、佐伯小学校で四年生のとき(大正八年(一九一九年)四月―同九年三月まで、木村タケ先生担任)一年間同じ組で、机をならべて勉強した。たしか老生が組長で、矢田八重さんが副組長だったと記憶している。六十二年前のことである。また一昨年昭和五十四年文化の日、私が勲四等瑞宝章を戴いたとき、御鄭重なご祝辞と

佐伯の山際の武家屋敷の写真をご恵送して下さいだったので、敢て拙稿を草して追悼のこぼを贈り、謹んでお悔み申し上げることとする。

高木嘉吉佐伯史談会々長の追悼文を読み、一層その感  
を深くした。

先生は昨年春、風邪をこじらせて肝臓を悪くし、肝硬  
変へと進行して亡くなられたと始めて知った。診ていな  
いので確信は出来ないが、恐らく全く感冒の症状と同じ  
の急性肝炎にかかり、絶対安静せねばならぬのに、先生  
の熱烈な責任感が病勢をつのらせて死期を早めたのでは  
なからうかと思ひ、残念で気の毒に耐えない。七十七歳  
と言へば、一応年に不足はないかも知れないが。

生前先生自ら手がけた『佐伯史談』のエネルギーシ  
ュな謄写版印刷の流麗な文字を拝見、また時々投稿され  
いた大分合同新聞の「灯」の文章を拝読するたびに、せ  
ひ一度先生にお目にかかつて、いろいろご示教を賜りた  
かったが、もうそれも及ばない。史談会のため、佐伯の  
ため否世のため、まことに惜しい人材を失ったと嘆息す  
るのみである。先生の詳細な業績については高木会長さ  
んの追悼文を一読すればよく判る。

先生は郷土佐伯の爲め、ローソクの炎の如く、その生  
命を燃え尽くして倒れたのである。以って冥す可しとい  
うべきか。男子の本懐と申すべきか。

良寛禪師曰く「人間は死ぬる時節には死ぬるがよく候、  
これぞこれ災難をのがれる妙法なり」と。生者必滅。会  
者定離は世の定め、いずれ我々も近いうち、この世を去  
って先生の膝下へ馳せ参ずる。そのときはゆっくりお目  
にかかつて、お話を承りたい。先生のご冥福を祈ってペ  
ンを擱く。八重さん、ご主人のみ霊の守護へお努め下さ  
い。

合掌

最後にゲーテの言葉を捧げる。

「最大の奇跡は自分が生きていることだ」

## 回想 羽柴 弘 先生

案 浦 照 彦

(会員・福岡県春日市)

時はたしか、昭和四十七年のころと思います。臼杵の  
高橋長一先生の御紹介で、羽柴先生とお会い致したのが  
最初でした。

当時、私は陸上自衛隊第四師団に勤務致して居り、『鎮